

島田正治

沢田大暁先生が亡くなった。九十一歳であった。これは、きのう家内からのファックスでその訃報を知った。遅くなったがこの誌上をお借りして先生のご冥福をお祈り申し上げる。

先生と初めてお会いしたのは、もう三十数年前に遡る。

八王子在住の作家の瀧井孝作展が八王子大丸デパートで開かれ、そのオープニングに招かれ出かけた。来賓の中に沢田先生が居られた。何人かの方のあいさつや祝辞がのべられたが、沢田先生の祝辞がまたふるっていた。「最初、この大先生である瀧井孝作さんを訪ねてきた折、駅前で高校生をつかまえて、作家の瀧井孝作という方の家を知っておるかね、と聞いたら知らないという。それでわしゃ叱ってやった。天下の瀧井孝作を知らぬは何事だ。けしからん」と。先生は、四国松山弁でとうとうと話す。熱中すると前後がわからなくなってしまるらしい。

沢田先生のごことは、以前からも知っていた。独立書道会の重鎮であった。家内がわたしと結婚する前はこの団体の会員であったし、家内の師匠である堀桂琴さんには愛弟子でかわいがってもらった。特に小池邦夫の松山東高校の書道の先生を勤められた。で、その後の話になるが、先生の招きでわたしは松山へ行ったことがある。折りから県立愛媛美術館で「富岡鉄斎」展が開かれていて、これも見たかった。四国へ出かけたのはこれが最初で、瀬戸内海沿いを通って行った。松山駅前には市電が走っていた。

先生の家には三日ぐらい滞在したと思う。ちょうど奥さんが亡くなられた直後で、ご仏前にお線香を供えた。家内がないので、先生はちょっとさびしそうであった。夜、近くの飲み屋へ連れていってもらい酒を飲んだ。先生は端唄が上手でなかなか粋なところがあった。その折、この習字誌に何か書いてくれないかねとたのまれて、わたしもまたその気になって、毎月一回、原稿用紙五枚ていど掲載することになった。『白雲ノート』 ” その覚え書 ” と題し、内容は「小池邦夫のこと」とした。

小池邦夫のこと。これは何年か前からわたしあて手紙がかなりたまっていたので、その最初きた八ガキ一枚から本文をそのまま記してドキュメント風に、その人間性、生きざまを追い綴った。これはけっこう続いて百回まで書いた。

やがてわたしは、五十五歳からメキシコに住むようになって、この「小池邦夫のこと」から、現在の「チャパラだより」と変った。白雲ノートは変りはない。書きつづけること、その回数も三百六十回となる。いまだ一度の欠稿もない。(ただし、一度だけ原稿未到着ということがあったがこれは何かの手ちがいであった)瀧井孝作文章道は「あったことをそのまま書く、けっして嘘は書かない」だが、これを信奉する限り、書くことは永遠に尽きぬ。(つづく)